タイのお正月

堀　浩子

タイの「お正月」はソンクラン

一九九九年四月、夫の赴任に伴って三人の子どもと共にタイ、バンコクに渡った。三年間の住居となるマンションに入居して数日後、「歓迎行事です」と夫の同僚の訪問を受けた。マンション内のプールサイドでの記念撮影を勧められ、家族五人で「チーズ」と声をそろえた瞬間、どこに身を潜めていたのか総勢十人位の他の同僚や家族たちから思い切り水をかけられた。これが「水かけ祭り」と言われるソンクランの日恒例の「歓迎行事」で、こうして私たちはタイの「お正月」であるソンクランを、まずは

身をもって体験させてもらったのだった。

ソンクランについて、タイの小二生の生活科の教科書には「タイでは四月十二日から十四日までの三日間を昔から今に続く正月としている。最近では家族の日ともされている。ソンクランの前には家の内外を特別にきれいに清掃し、当日は家族でお寺にお参りしたり、僧侶に托鉢したり、徳をつむため魚や鳥を放生したりする。また銀の器に水を入れ、僧侶や仏像に水かけをして恵みを祈ったりする。正月を祝う決まり事が済むと、友だちや親類同士水をかけ合ったり昔ながらの遊びをして楽しむ」と説明されていて、日本の「お正月」と似通うところが多くある。

国際的な新年として一応タイでも一年は一月一日に始まり、この日も新年を迎える祝日にはなっている。十二月下旬には新年を祝うタイの歌がそこここで聞こえたり、大晦日の深夜にはイベント会場でカウントダウンや花火が企画されたり、テレビでもタイ版「ゆく年くる年」が放映されたりする。日本とは二時間の時差があるので、私たちは十時前に紅白歌合戦を見終わり「ゆく年くる年」で除夜の鐘を聞いてからタイの新年を迎えていた。日本と異なるのは、年が明けるとまずすべてのテレビ局が年頭の言葉を述べる国王を映し出し、次いでタイで信仰されている主だった宗教の代表者が年頭の言葉を一人ずつ述べていくことだ。こんなふうに新年を迎える行事があるにはあるが、公共機関や学校も元日が祝日扱いで休みになるだけであまりふだんと変わりない。

それに比べてソンクランの三日間は公共機関も民間の大小企業もほぼ完全にストップする。営業するのはコンビニエンスストアか主に外国人客をターゲットにしたスーパーマーケット、レストラン位だと思う。学校は年度替わりの約二ケ月の夏休み中だ

し、帰省する人も多いので、日頃渋滞の激しいバンコク市内も丁度三ケ日中の東京のようにガラガラになる。タイの人にとってはやはりソンクランが「お正月」なのだ。

街なかのソンクラン風景

滞泰中三度のソンクランを私たちはバンコクで過ごした。

この三日間油断は禁物である。初めの年家族で歩道を歩いていたら、見知らぬ人がすれ違いざまに水鉄砲で私たちに水をかけてきてニヤニヤしている。初めてで少々驚いたが、ソンクラン中にはよくあることだった。でも怒ってはいけない。相手に感謝して、できればこちらからも相手の幸せを願ってかけ返すのがソンクランの礼儀ということらしい。

ガラガラになった市内では、歩道で子どもたちがバケツと水鉄砲を用意して通りかかる人や車を待ちかまえている。車道ではピックアップトラックに大きな甕やドラム缶に満タンの水と水鉄砲を持った人たちを乗せた機動部隊が往来し、歩道の人に水をかけたり居合わせた車同士激しくやり合ったりする。我が家の車も信号待ちの時など歩道や車上から何度か思い切りかけられたこともある。

タイの気候の中でも最も暑いこの時季、農閑期や学校の夏休みも重なり、タイの各地でお正月気分で思い切り盛り上がるようだ。水のかけ合いに気を取られて、毎年のこの時期事故で亡くなる人が何人かいるのだそうだ。

三年目のソンクランではマンションの駐車場で、馴染みの運転手さんや警備員さんたちと私たち一家とどちらからともなく水のかけ合いが始まった。興じるうちに双方完全に無礼講で思い切りやり合って皆全身ビショビショになり、思わず心の底から笑い合ったことは忘れられない思い出になっている。

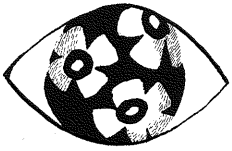
ソンクランと帰省

この休日は地方からバンコク等の都市に出て職に就いている人にとって、故郷の家族、親族、友人に会える貴重な時でもある。お手伝いさんの仕事に就く女性には親への仕送りや子どもの養育費のために出稼ぎに来ている人が多かった。我が家のお手伝いさんも三歳と五歳の娘を自分の親元に預けて夫婦でバンコクに来ていた。タイでは全国的に母方の祖母が子どもの世話を引き受け、母親も仕事をして家計を支えるのが通例らしい。だからこういうタイの女性にとっては特に、ソンクラン休暇の帰省が大切な機会なのだ。

滞泰中、私は多分一生に一度の、お手伝いさんを雇う経験をすることになった。お手伝いさんとの面接では契約書に必ずソンクラン休暇の項目について確認し合う。ソンクランそのものは三日間だが、実家の遠い人は帰省の往復日数も含めた休暇日数を約すべくこの時交渉する。また規定の賞与をこの時期に受け取りたい場合はこの時申し出るなど、彼女たちにとっては労働条件の重要な一要素になっている。なるべくたくさんおみやげを仕入れ、なるべく長く故郷にいられるよう腐心するのだ。同じ方面に乗り合わせていくバスのスケジュールと休暇日数が都合よく合わない時は、彼女たちは悪びれもせず「バスがないのでこの日までに戻れません」と、契約したはずの休暇日数を延ばすのである。

バンコクからは同時期に同じ地方に帰省する人が集まるので、往復ともバスはたいてい定員オーバーで、時には道中半日ずっと立ったままのこともあるそうだ。

どんなに大変な思いをしても故郷に残した人たちに会いに帰る



日、多くのタイの人にとってソンクランはそういう日でもある。

タイの人の気性

私の知る限り、タイの人には日本人にとって程「がんばる」ことが快感ではないと思う。もともとタイ語にはその単語もなかったが外国語と対訳するため作られたとかで「パヤヤーム」という、日本語のイメージからすると何だか軟かい響きの言葉だ。熱帯にあってとりあえず生きるに充分な食糧を手に入れられるタイの人には「がんばる」必要も習慣も生まれてこなかったということかも知れない。

また余程自分の生活に支障がなければ、心地よく感じられないことは無理してやらない。面倒だ、疲れる、好きじゃない、おもしろくない、というのも何かをしない理由として通用するのである。言い換えれば、自分はもうこれで充分、と足ることを知っている、ということでもあると思うが。

だからそんなタイの人たちが帰省ラッシュにもめげず故郷に向かう様子はあまり似合わない気がしてちょっと不思議だった。でも今改めて思い返すと、タイの人に根づいた生き方がそこに現われているとも思えてくる。

タイの人の心に根づくもの

タイの人たちは男女を問わず、また若い人でもすごく子どもを可愛がる。商店やレストラン等で子どもを連れていると、初対面でも、手すきの店員が目を輝かせて話しかけてきて、手をつないだり、抱き寄せて頬ずりやキスをしたり、こちらが戸惑う程かまってくれる。四歳で渡泰した坊主頭の長男は、当時タイで人気だったテレビアニメの「一休さん」の影響もあって、わざわざ他の同僚を呼びに行ったり、別の部屋にいる同僚に見せに連れて行かれそう

になったこともある程だ。

また観光地などに出稼ぎに来ている女性たちの子どもを見る目にはもっと熱いものがあった。海辺の屋台のおみやげ屋で買い物をした時、当時小五だった長女の年齢を聞いて「私にも同じ年頃の娘がいて田舎に残して来ている。三人とも可愛いからこれをあげたいんだけど」と売り物の小さなカエルの玩具を一つずつ子どもたちに持たせてくれた女性がいた。自分の収入は減ってしまうのに、私たちが戸惑いながらもお礼を言うと彼女は「(受け取ってくれて)うれしい」と笑っている。また、別の観光地で、小二だった次女が買い物をした屋台の女性は、娘が自分のおこづかいで買うと知ると途端に目が優しくなり、結局初めの値の四分の一にもなる娘の言い値で「いいよ」と言う。それでは赤字だろうと思うのに、うれしそうにお礼を言う次女を見て満ち足りた笑顔を返してくれるのだった。

タイの人には、相手が子どもの事となると仕事や損得勘定は全く度外視して、何かをしてあげたいと思う心のままに動いてしまうところがある。そういう人や場面にずいぶん出会った。子どもを可愛がること、大切に想うこと、子どもを可愛いと思う気持ちを大事にすることがタイの人にとっても心地よいと感じられることなのだと思う。そうなるとどんなに大変なことでもできてしまうのだろう。きっと、だからどんなにクタクタに疲れても面倒でも、ソンクラン休暇には大切な家族たちのいる故郷に帰省していくのだと思う。

学生時代に聞きかじった比較行動学の話の中で、哺乳類の動物はたとえ肉食であっても子どもの特徴を持つ相手に対しては攻撃しない「本能のスイッチ」のようなものを持っていて、その能力を持つ種が結果的に存続してきていると聞いたことがある。タイの人の子どもへの対し方は、この「本能のス

イッチ」という言葉を思い起こさせる。自然の命ずる心の動きにけっして逆らわない。むしろそれを人として心地よい感情として肯定できる心が根づいているように感じる。

またタイの人は男女を問わず、何の照らいも躊躇もなくお年寄りをいたわる。その行為もまた、そうすることを心地よいと感じられる同じ心根から生まれているように思える。

タイの国に学ぶ

全くの私観なのだが、タイの社会では、その理屈抜きの子どもへの思いが子どもにも理屈抜きに伝わり、それが自分の存在への自信、父母や年長者への信頼と敬意といたわりの気持ちを生み、長じて今度は自分が同じように子どもを可愛がる、そんな循環のようなものがずっと機能し続けている気がする。

帰国後、愛情に恵まれない子どもが増えている日本の状況を知るにつけ、自然の摂理を損わず、未来につながる人の心根を支える社会を築いてきたタイの人々の知恵に、学ぶべき事がたくさんあると改めて思っている。

四月半ば、日本でも流れるソンクランのニュースに、タイの人たちの子どもたちをみつめる熱い眼差しを、また思い出していた。

（北海道幕別町代替保育士）